学生海外調査研究	
モロッコにおけるイスラーム知識人の著作と知的伝統に関する写本史料調査	
氏名 野口 舞子	比較社会文化学専攻
期間	2014年11月21日～2014年12月2日
場所	モロッコ王国・ラバト市
施設	王立図書館、国立図書館等

内容報告

1. 海外調査研究の内容と目的

報告者の関心は、11世紀から13世紀のマグリブ（北西アフリカ）・アンダルス（イスラーム政権支配下のイベリア半島、711年から1492年までイスラーム王朝が支配）における支配者と被支配者の関係にある。これは、ムラービト朝（1060年頃-1147年）、ムワッヒド朝（1130-1269年）の時期に相当するが、この二つの王朝はともにマグリブとアンダルスの両地域を支配しており、これは両地域の歴史にとっても類をみない広大な地域が、一つの王朝下に支配された時代とすることができる。とりわけ、ムラービト朝は、サハラ砂漠西部出身のベルベルによる王朝であり、マグリブ、アンダルス双方の地域の人々にとって外来の王朝だったといえよう。外来の支配者はどのようにこの二つの地域を支配したのか、またその支配はどのように受容されたのかという点について、報告者は軍事支配者と、被支配者である民衆、そして両者の仲介者としてのイスラーム知識人（ウラマー）という関係を措定し、これまで支配者とウラマーにそれぞれ焦点を当て、研究を進めてきた。

ムラービト朝期のウラマー、とりわけ、イスラーム法を修めた法学者の、知的活動および政治・社会的役割に関しては、これまでに多くの研究成果があるといえる。それらにおいて、アンダルスでは、法学者がムラービト朝征服以前からの文化的繁栄や制度を引き継ぎ、裁判官を頂点とする司法行政が整えられていたことや、マグリブのムラービト朝政権の政策決定にも大きな影響力を持ったことが明らかにされている。他方で、マグリブのウラマーや法学者に関する同様の研究はほとんどなく、わずかにある研究も王朝の後半期に集中している。しかしながら、そもそも、ムラービト朝というのは、マグリブ南部の法学者に率いられた宗教的な民衆教化運動に始まるとされ、王朝の草創期（1050-60年代）からアンダルスの遠征・征服（1086年-）までに、これらのウラマー研究には時間的にも、地理的にも数十年間の研究上の空白があるということが指摘できる。これまでは、ムラービト朝政権とアンダルスのウラマーの結びつきのみが強調されてきたが、マグリブのウラマーの位置づけや、マグリブのウラマーとアンダルスのウラマーの関係を議論したうえで、王朝下のウラマーの性格を明らかにする必要があるといえよう。

こうした研究上の空白の背景には、史料状況も関係している。アンダルスでは、ムラービト朝の征服より以前に、既にウラマー伝記集を編纂する伝統があり、上述の研究もこのような複数の伝記集から進められてきた。しかし、マグリブでは、同時代またはそれ以前に同様の史料は存在しておらず、ムラービト朝後期にセウタ（北アフリカ側にある現スペイン領）出身の法学者カーディー・イヤード Qādī 'Iyād（1149年没）によって初めて法学者伝記集『マールイク派の偉人の知識に至る能力の秩序と接近（以下、秩序と接近）¹⁾』が編まれた。この作品では、イスラームの初期からカーディー・イヤードが生きた時代までが扱われ、マグリブのウラマーに関しても情報が得られる、非常に重要な史料である。他方で、この『秩序と接近』にはいくつかの後継作品が存在し、そのうち、カーディー・イヤードの弟子とされるイブン・ハマダ Ibn Ḥamāda（没年不明）によって著された『能力の概要（以下、概要）²⁾』も同様にマグリブのウラマーの情報が得られる。しかし、本作品はこれまで部分的に校訂・出版がされているのみで、史料の全体像が不明なまま研究者に利用されてきた。今回の海外調査では、この『概要』を調査することとし、『概要』の原本である写本史料を入手し、史料の全体像の把握に努めることにした。

また、カーディー・イヤードは、上述の法学者伝記集だけでなく、イスラーム法学や預言者ムハン

マド崇敬の書なども著し、特に後者に関しては、没後から現在に至るまで多くの解釈書や研究書が著されている。後世に影響を与えたウラマーの一人であるといえよう。彼はムラービト朝体制寄りのウラマーだったともされており、その生涯や思想を検討することで、一人のウラマーにおける知的活動と政治的、社会的な行動の双方が明らかになり、当時の著名ウラマーの一つの型を見出すことも可能であろう。さらに、伝記集から抽出した数量的なデータと、ウラマー個人の質的なデータを組み合わせることで、ウラマーを多角的に分析することができると考える。以上から、今回は、彼の作品のうち、金曜礼拝における説教（フトバ）を集めた、説教集の写本を閲覧・筆写するとともに、内容を分析し、イヤードの思想を解明する手がかりを得ることとした。

以上の問題関心から、ムラービト朝期のマグリブにおけるウラマーの活動と役割、および思想の一端を明らかにするために、2014年11月21日から12月2日にかけて、モロッコ王国ラバト市において写本調査と写本分析を行った。

2. 調査の概要と研究への位置づけ

本調査は、(1) 図書館における写本調査 (2) 写本分析 (3) 資料収集および研究状況の調査の三つからなる。平日の日中は図書館での写本調査に多くを費やしたため、以下の報告ではどのように史料を閲覧し、入手したか、という点も記述することにする。ただ、これらは報告者が実際に行った手続きのみ記すこととし、記述も簡単なものとする。なお、写本を所蔵するモロッコの図書館に関しては、既にヘンドリックソン Hendrickson によって有益な図書館案内が著されており、報告者が今回訪れた図書館についても詳細な記述がある。また 2013 年には、図書館案内の追加調査が行われ、成果が公表されている³。詳しい図書館利用案内としてはそちらを参照されたい。

2.1 写本調査

2.1.1 王立図書館 Bibliothèque Royal (通称ハサニーヤ図書館 al-Khizāna al-Ḥasaniya)

最初に、王立図書館において写本調査を行った。王立図書館は、ラバト市内のモロッコ国王の住む王宮の敷地内に位置し、一般にヒザーナ・ハサニーヤ（ハサニーヤ図書館）という名で知られる。王宮の敷地内へは警察の許可がないと入れないので、まず王宮入り口の警察署でパスポート等を提示し、図書館への訪問を伝える。2014年11月末現在、館内の修復中であり、数年前に訪問したときは閲覧室の場所も変わっていた。閲覧室では、資料閲覧のために資料と申請者に関する事項を閲覧申請用紙に記入する。なお、パスポート（顔写真および入国番号の入ったページ）のコピー、証明写真、欧文の身分証明書などを揃えると入館証の発行が可能となる。

王立図書館では、本調査において最も重要な柱として位置づけていた、カーディー・イヤードの『秩序と接近』の後継作品である『概要』の調査を行った。閲覧室には他館のものを含め、写本カタログが複数用意してあり、その場でどのような写本が所蔵されているのか調べることも可能である。今回は検討したい写本および写本番号が明らかであったため、閲覧申請用紙に必要な事項を記入するとすぐにスタッフが史料を用意してくれ、早速写本調査に取りかかることができた。『概要』は、既にデジタル化されており、画像をパソコンに映し出して調査を行った。なお、複写に関しては、これまで王立図書館では複写は出来ないと聞いていた。しかし、今回の調査では、写本を特定した複写依頼書を持参したため、訪問2日目の終わりに無料で画像電子ファイルを手に入れることができた。写本の画像ファイルの入手は本調査の最大の成果とすることができる。王立図書館においても、史資料のデジタル化および閲覧・複写のシステム化が進んでいるということなのだろう。なお、今回調査したのはこの写本のみで、他の写本は検討していないため、他の写本の閲覧・複写の状況は不明である。

『概要』写本については、全体で140葉余である。紙の端や見開きの中央部などに虫食いがあるほか、経年などによるにじみで文字の色が薄れている部分もあるが、文字は丁寧に書かれており読み取りやすい部分も多い。写本の読解には時間と技術を必要とし、アラビア語テキストの文字の書き起こしから始まり、内容理解を経て、データ分析を行うことになる。しかしながら、写本を概観しただけでも『概要』の部分的な校訂は全体のほんの一部であることが見てとれ、この写本の検討・分析が非常に重要となることがわかった。今後、『概要』の未校訂の部分を含む史料全体の伝記情報のデータベース化を行い、これまで行ってきたマグリブ・アンダルスのウラマーとのデータとの突き合わせや比較検討を行えば、ムラービト朝期のマグリブのウラマーの活動や役割を明らかにする非常に意義深い研究となると考える。

2.1.2 国立図書館 Bibliothèque National du Royaume du Maroc (通称ワタニーヤ図書館 al-Maktaba al-Waṭaniya li-l-Mamlaka al-Maghribīya)

国立図書館でも写本の調査を行った。国立図書館もラバト市内にあり、図書、雑誌、写本等の蔵書

は国内随一である。入館に際しては、クロークで荷物を預けた後、入り口でパスポートを渡し、その代わりにゲートを通過する際に必要となるカードを受け取る。写本閲覧については、閲覧申請用紙に資料と申請者に関する事項を記入すると、しばらくして写本室のスタッフがマイクロフィルムを映写機に設置してくれる。

今回、調査対象とした写本は、上述のカーディー・イヤードが行った説教（フトバ）の説教集である。ムスリムは金曜日に集団礼拝を行うが、その際に、導師（イマーム）がフトバを行う。これはそのフトバをまとめたもので、カーディー・イヤードの著作の中でもほとんど研究が行われてこなかった。報告者は2010年12月から2013年5月までモロッコのラバト市へ留学を行っており、この写本は、その際に入手したものである。帰国後も写本の分析につとめていたが、複写が紙媒体でしか得られず、読み取りが難しい箇所があったため、今回、国立図書館においてそれらの確認を行った。写本の分析内容は以下の節に記す。

2.2 写本分析（フトバ集写本）

前節で述べたように、カーディー・イヤードのフトバ集については、原本を確認すべき点について写本調査を行ったことに加え、写本の内容分析を行った。フトバに関しては、啓典であるクルアーンの引用が多くなされていたり、イスラームの理解が十分でないという話や、独特の言い回しが用いられていたりする。こうした部分への理解を深めるために、留学中にアラビア語の指導を受けた先生に、文字の書き起こしの確認とアラビア語の教授を依頼した。この写本では、カーディー・イヤードより後代のイブン・マルズーク Ibn Marzūq (1379年没)のフトバが大部分を占め、その間に、カーディー・イヤードのフトバがわずかに挟まれる。カーディー・イヤードのフトバについては合計58葉中6葉（11ページ）を数えるのみである。

内容に関しては、6葉に六つのフトバが含まれていた。うち、三つは敵に対するジハード（聖戦）を鼓舞するもので、残りの二つが行いを正しくせよというもの、最後の一つが特定の者たちに対する警告、という内容のものである。特定の者というのは、ムラービト朝を倒したムワッヒド朝君主とその関係者に対するものである。カーディー・イヤードはムラービト朝体制寄りのウラマーで、ムラービト朝が崩壊する際、ムワッヒド軍に抵抗したが、その後ムワッヒド朝指導者の元に招かれたとされている。とは言うものの、彼がムワッヒド朝指導者に対して行ったフトバが残存していること自体驚きであり、新たな発見であった。また、先生からは、フトバの内容から、これらはムラービト朝が崩壊する頃に、ムラービト勢を鼓舞するものから、最終的にムワッヒド側に身を転じて発したものであり、時間を追って発されたものではないかという助言を得た。これらのフトバが意味することや示唆する内容については、他の史料とも突き合わせを行った上で再検討する必要があるが、こうした史料の読解方法について助言を得たことは今回の調査における大きな収穫だったといえる。

フトバ集の分析からは、その内容が普遍的なモチーフである部分と、当時の時代や作者カーディー・イヤードの思想を反映した独自性のある部分とが混ざり合ったものであると考えられ、新たな研究の方向性を感じた。今後は、伝記集からの情報に加え、フトバの内容や他の著作から思想を検討することによって、より豊かなウラマーの実態が浮かび上がると考えられる。なお、カーディー・イヤードの説教集は、当該写本に加えフェスのカラウィーイーン図書館にも所蔵されており、こちらも報告者は入手済みである。こちらは、ワタニーヤ写本に比べれば分量があるが、ムスリムが断食を行う月（ラマダーン月）に話される内容であり、宗教的・規範的な内容が強く、フトバの範例としての役割が強いように思われる。今後はこちらの写本についても分析を続けていきたい。なお、アラビア語史料の読解という点に関して言えば、これらの写本分析に加え、即位儀礼における契約文書の作成方法などについても当該の先生から有益な知識を得た。

2.3 資料収集および研究状況の調査

調査の三つめの柱として、現地研究者との面会や資料収集によって最新の研究状況や動向を捉えることとした。資料収集に関しては、国立図書館で研究書の複写を行ったほか、ラバト市内の主要な書店で研究書および歴史史料を渉猟した。また、同じくラバト市内にあるムハンマド5世大学の大学出版の購買部においても研究書を入手した。今回、留学後一年半ぶりのモロッコ調査となったが、報告者の研究対象に関係する本は当時からあまり増えていない印象であった。

研究状況の調査については、ムハンマド5世大学のハーフィディー Hassan Hafidi Alaoui 先生、ブーシャントーフ Lotfi Bouchentouf 先生といった現地研究者との面会を通じて、研究への助言を得た。共に、快く面会の依頼を引き受け、最新の研究動向や博士論文執筆への具体的な助言や情報を数多く提供下さり、新たな知見を得ることができた。色々な話をした中で特に印象深いのは、今後ムラービト朝揺籃の地であるモーリタニアやセネガルにおいて図書館や文献の調査が必要になるだろう、

ということだった。自分たちの歴史をどこから書き始めるかという国民意識（アイデンティティ）と歴史叙述の問題はこれらの地域にも及んでおり、近年、彼らのルーツとしてムラービト朝が取り上げられ、研究書が多く出版されるようになってきたという。これは、報告者も予てより関心がある内容であったので、非常に興味深く聞いた。しかし、書店などを見た限り、それらの文献はまだラバトへはあまり流入していないようであり、今後、これらの地域への調査も必要になると思われた。

また、2014年10月よりフランス、パリのルーブル美術館で行われている「中世モロッコ展⁴」についても話が及んだ。これは、ルーブル美術館で開催中の企画展なのだが、まさに報告者の対象とする時代が、この展示でも対象とされているとのことで、展示内容、特に考古学的な発掘成果から、ムラービト朝史研究に非常に有益な情報が得られるとの助言を得た。近年、マグリブ・アンダルス研究ではこうした考古学と歴史学の連携が進んでいるが、ムラービト朝のような文字史料があまり残存していない時代に関しては、今後ますますその傾向が強まると思われる。面会では、ムラービト朝をどう捉えるか、それはどのような時代だったのか、といったテーマに対し、現地の歴史研究者と直接意見を交わすことができ、非常に貴重な機会となった。

この他にも、留学中にお世話になった先生方や友人にも調査の合間に会うことができた。皆、留学中と変わらず暖かく迎え入れてくれ、心が熱くなるとともに、直接会って関係を保ち続けることの大切さを改めて痛感した。

最後に、ラバト市で行った今回の調査では、都市開発と食糧等の物価の上昇を目の当たりにすることとなった。現在、モロッコの政情は安定しており、経済成長率は2018年までの今後5年間で平均5%弱と、北アフリカで最も高い成長率が見込まれ、インフレが進行している⁵。ラバト市は2014年から2018年にかけて、都市開発計画が立てられており、劇場や博物館、商業施設などの建設が各地で進んでいる⁶。他方で、物価の上昇は一般市民の生活を圧迫するに違いなく、一段と貧富の格差や地域差が広がることが予想された。開発・発展を続ける街と、モロッコの人々のくらしがどのように変わっていくのか、今後も注意深く見守っていきたい。

3. 今後の展望

今後は、まず入手した写本『概要』の読み込みを進めることにしたい。文字の書き起こしや内容理解、データ集計を経て、ムラービト朝期におけるマグリブのウラマーやアンダルスのウラマーに関する比較分析に加え、カーディー・イヤードの『秩序と接近』との関係、他の後継作品との比較なども必要となるだろう。他方で、写本の読解を確かなものにするため、再度、モロッコなどで研究者に教授を請う必要がある。フトバ集については、今回分析した国立図書館写本に加え、カラウィーーン写本の分析を進め、両者の比較検討を行うことにしたい。また、カーディー・イヤードについては、経歴と思想の双方から彼の生涯を明らかにし、ムラービト朝政権との関係を再検討する。以上のような分析結果や成果は、今後査読誌の投稿論文として公表し、博士論文の核となるよう組み込む。また、調査の成果を発表する際には、研究の質を高め、国内だけでなく、国際的にも通用する研究となるように務め、本調査の成果としたい。

注

1. 'Iyād b. Mūsā, *Tartīb al-madārik wa taqrīb al-masālik li-ma'rifat a'lām madhhab Mālik*, ed. by S. A. A'rāb et al., 8vols., Rabat, 1983.
2. Ibn Ḥamāda, *Mukhtaṣar al-madārik*, al-Khizāna al-Ḥasanīya, ms.672.
3. Hendrickson, J. N. & Adil, S. (2013) "A Guide to Arabic Manuscript Libraries in Morocco: Further Developments", *MELA Notes: Journal of Middle Eastern Librarianship* 86, 1-19; Hendrickson, J. N. (2008) "A Guide to Arabic Manuscript Libraries in Morocco, with Notes on Tunisia, Algeria, Egypt, and Spain", *MELA Notes: Journal of Middle Eastern Librarianship* 81, 15-88. なお、日本語によるモロッコの図書館案内としては、私市正年 (2008)「モロッコ」小杉泰他編『イスラーム研究マニュアル』名古屋大学出版会、pp.549-551、がある他、東洋文庫研究部イスラーム地域研究資料室による図書館案内もインターネット上で公開されている。<http://tbias.jp/guide/morocco> (柳谷あゆみ報告) (2014年12月30日最終閲覧)
4. 企画展が対象としているのは、11世紀から15世紀である。インターネットサイトは以下の通り。<http://www.louvre.fr/expositions/le-maroc-medieval-un-empire-de-l-afrique-l-espagne> (2014年12月30日最終閲覧)
5. 植田賢司 (2014)「モロッコ経済の現状と今後の見通し」『国際通貨研究所ニュースレター』13, pp. 2, 10-11.
6. 在モロッコ日本大使館経済班 (2014)「モロッコ経済日誌2014年5月」p.2.
<http://www.ma.emb-japan.go.jp/pdf/keizainisshi/Keizainisshi201405.pdf> (2014年12月30日最終閲覧)

参考文献

'Iyāḍ b. Mūsā, *Tarṭīb al-madārik wa taqrīb al-masālik li-ma'rifat a'lām madhhab Mālik*, ed. by S. A. A'rāb et al., 8 vols., Rabat, 1983.

のぐち まいこ／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

モロッコにはアラビア語写本3万6千点があり、これは歴史研究の宝庫である。しかしながら、写本の読解には、アラビア語力のみならず、手書き文字や写本の筆記法になれる必要があり、現地での訓練がもっとも効果的である。今回の現地調査によって、王立図書館所蔵の写本史料の画像電子ファイルを入手するとともに、現地の指導者のもとで実際に講読し、経験と知識をえたことは、今後の研究の可能性を飛躍的に向上させるものといえる。また留学時より指導を受けている現地の大学教員に面会し、自身の研究の進捗を報告するとともに最新の研究状況を把握したことは、今後の博士論文を構想・執筆していく原動力となる。

(お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科文化科学系教授・三浦 徹)

Research on the manuscripts by Maghribi ulama and their intellectual tradition in Morocco

NOGUCHI Maiko

My research aims to elucidate the activity and role of ulama in the Maghrib and al-Andalus (Muslim Spain) from the 11th to the 13th centuries, i.e. the era of Almoravids (ca.1060– 1147) and Almohades (1130- 1269). Although former studies have pointed out the ulama's socio-political influence under the Almoravids, they mean the Andalusī ulama in most cases and the Maghribī ulama are out of focus. There are some unpublished manuscripts such as biographies which give us valuable information on the Maghribī ulama. To research the Maghribī ulama's intellectual tradition, I conducted the survey of the manuscripts at the Royal Library and the National Library in Rabat, Morocco.